

## ■分科会『特色GP パネルディスカッション』

○進行：それでは、お待たせいたしました。これからパネルディスカッションに移りたいと思います。

その前に、このパネルの趣旨と、それから午後の第1部のところをご欠席の方もいらっしゃるだろうということで、パネルの趣旨に合わせて、絹川先生から一言ごあいさつをいただきたいと思います。実施委員会の委員長であります、前国際基督教大学学長の絹川正吉先生です。お願いいたします。



○絹川：(拍手) 拍手をいただいて恐縮です。

先ほども少しごあいさつ申しましたので、繰り返しはやめまして、端的に、このシンポジウムの意味と申しますか、期待と申しますか、そういうことについて、私の感想を一言申し上げたいと思います。

「特色ある大学教育支援プログラム」ということですが、「特色」という言葉について、いろいろご議論がございます。私は端的に、「特色」ということを読みかえて、「優れた大学教育」とは何か。「特色ある大学教育」というよりも、「優れた大学教育」というふうに言い換えて考えます。「優れている」ということで評価が行われるわけですが、その教育評価に関しては、率直に言って、はっきりした手続きというか、あるいは基準というか、そういうものがないわけです。

審査部会における審議等の様子を拝見しながら私がつくづく思いますことは、大学教育評価というのは、一つの共同的な取組である。評価する者、される者という階層的な問題ではなくて、評価する者自身が、評価するという行為を通じて、自分自身の大学教育に対する見識が問われるわけです。それは当然、評価される側に関しても同じであるわけです。むしろ評価され

る側は、評価させるという気概があってもいいのではないかと思います。

評価する者と、される者と、一応階層的に言いますが、それがお互いに見識を出しあって、ぶつかって、審査委員会におきましては一義的な考え方はなかなか得られないわけですから、当然、審査委員の間で、審査に関して、意見がぶつかるということがたくさんございます。すなわち、大学教育というものに対する見識がせめぎ合う場面が、たびたびございます。

本日のシンポジウムにおきましても、事例発表なされた先生方、そしてまた審査に当たられた先生方の大学教育に関する見識がせめぎ合うことを通して、私どもも一緒に、優れた大学教育とは何であるかということ、考えさせていただきたいと思うわけです。どうぞ先生方、よろしくお願いいたします。(拍手)

○進行：絹川委員長、ありがとうございました。

それでは、これからパネルディスカッションに移りたいと思います。司会は、立命館大学の大学教育開発・支援センターの江原教授にお願いしたいと思います。江原先生、お願いいたします。

○江原：司会を務めさせていただき江原でございます。立命館大学の大学教育開発・支援センターに勤務しております。よろしくお願いいたします。

特色GPの分科会の後半は、先ほど13時15分からご報告いただいた3つの取組のご紹介を踏まえて、審査部会の委員の先生方も交えて、パネルディスカッションを行いたいと思います。

全体のスケジュールは、大まかに2つに分かれております。初めに40分間ほど、事例報告者と審査部会委員によるパネルディスカッションを行い、続いて後半では、フロアの皆様との質疑応答、及び意見交換を行う予定です。

初めに、パネルディスカッションでは、審査を担当された3名の先生方から、事例報告の大学について、なぜこの大学や短期大学を採択したのか、何を特色として認めたのか、何が優れているのか、学士課程教育または短期大学士課程教育においてどのような意義を持つものであるのかなどについてお話をいただき、さらに、本日の事例報告以外で特に印象に残った取り組み事例や、今年度の申請取組の傾向などについて、お1人8分程度でお話をいただきます。大輪先生、吉原先生、島田先生の順にお願いいたします。

大輪先生は、芝浦工業大学の理事をされておられま

す。どうぞお願いいたします。

○大輪：大輪でございます。よろしくお願ひいたします。

今ご紹介いただきましたように芝浦工業大学の理事をしておりますが、非常勤でございます。というのは、特にほかに仕事があるというわけではありませんが、要するに、私はもともと企業の人間で、2003年まで40年間、東芝の研究所におりました。その途中で、研究所にいたのに、なぜか採用をやったということから、教育にちょっと入りまして、2003年にリタイアした後は教育のことをやっているということで、そんなバックグラウンドの人間だと思って、お聞きいただきたいと思ひます。

東北大学の審査を担当いたしました。ここにありますように、『「学びの転換」を育む研究大学型少人数教育—基礎ゼミを起点とした「大学での学び」の構築—』というものでありまして、これは先ほどの休憩時間の前に、東北大学の関内先生からお話がありましたけれども、受験中心の学びから大学における学びに転換することを目的として、本格的に実施されています。

15学部と書きましたが、これは実は間違いだったことがわかりました。10学部と、5機関だと思ひます。15部局と言ったほうがよろしいのかもしれない。そういう全学あげての取組であるということが、非常に大きな特色だと思ひます。

また、15名程度の学部横断型のクラス編成で、つまり、いろいろな学部の学生さんが入ったかたちで、クラス編成をして、18年度の実績ですが、名誉教授を含む200名以上の教員が参加して、実験ですとか、調査ですとか、討論、発表をやっています。

この教育の効果というのは、学生の受講率が非常に高いということですが、反応もよいこと、それからメディア報道など社会的な評価も高いということで、これは十分推定できます。これが選定理由とお考へいただきたいと思ひます。

委員として審査に参加して、すばらしかった、あるいはすばらしいと思ひるのは、先ほど申し上げましたように私は大学の教授をしたことはありませんので、そういう意味で、多少外側から見たということですが、まず第1に、全学をあげての学部横断型の教育であるということです。これは私が今、経営にタッチしております芝浦工業大学という単科大学のようなところで、学部が2つあるというだけで、その学部を横断し

ようと思ひると、抵抗がいろいろ出てきたりいたします。ところが、10学部あるいは15部局を横断して、1つの教育に取り組む。これは非常に感心いたしました。この辺については、是非後で関内先生から、どういう苦勞をされたというか、どういう工夫をされたかということをお話いただけるといいなと思っております。

また、学部横断型であるということと関連しますが、テーマが非常に多彩です。200人以上の先生方による知恵を絞ったテーマが並んでいるということで、これから東北大学へ入ろうという時期の3月に学生さんにシラバスが配られるわけですが、非常に魅力的に見えるのではないかなと思ひます。

第2に、何といつても他学部の学生と友人になれるということがあります。総合大学ですから、学部はたくさんあるわけですが、そうは言っても、こういう経験というのはなかなかできないと思ひます。私の出身大学も総合大学でしたが、私の学生時代を考へてみても、私は工学部ですから、まあまあせいぜい理学部の学生さん、先生を多少知っているという程度で、3年生のときに、文学部の心理学の講義を1つ取りましたが、総合大学ではほかの学部の学生さん、先生方とお付き合いするのはなかなかできないと思ひます。そうした点から見ても、この取組はすばらしいと思ひます。



これから大学で学んだということ、入学直後に実感できると思ひます。それがすばらしいと思ひます。

それから、少しダブるところもありますが、専攻の違い、価値観の違い人と議論ができる、あるいはむしろ、授業の進め方で議論をせざるを得ないということは、非常にいいと思ひます。

入学直後にグループ活動の体験を早いうちにできる

点も非常に素晴らしいことだと思います。

また、少人数教育を実現していて、教員との距離が近いということもよいことです。

一方、逆に見ますと、これは関内先生のお話にもありましたが、教員にとっては、今度は他学部の学生と接する機会が持てるということ、いろいろな意味で、非常に貴重なFDになるだろうということ、それから、それをお手伝いするTAにとっても、同様の得がたい経験になるということ。この辺のところ、素晴らしいところだと思います。

ただ褒めているだけでは議論になりませんので、心配点をあげます。

まず、1年生の最初にあるわけで、基礎ゼミは素晴らしいと思うのですが、基礎ゼミが終わってしまうと、今度は学部によっていろいろ呼び方があるのだらうと思いますが、卒業ゼミですとか、卒業研究に至るまでは、従来どおり大きな教室で一方通行の授業が、延々と続くのではないかなと。そうすると、その辺で、大学教育にちょっとがっかりしてしまうというようなことが起こらないか、そういう心配があります。

それから、タッチしている先生方が200名以上ということで、事前のFDが行われるようですけれども、この教育の目的、目標、意義などが、本当に共有できているのだろうか。口は悪いですが、当番に当たっちゃったから、しょうがない、やっているというような先生も中にはいらっしゃるのではないのかなという、ちょっと心配です。

もう1つは、先ほど質問の中にも出てきましたが、学生の希望が少数のゼミに集中する。あるいは、理系の学生は理系のほうに、文系の学生は文系のほうにというように、偏ってしまわないのかなという心配があります。

それで、そんな心配はまた後ほど関内先生からお答えいただけると一番いいと思いますが、委員としての感想、それから希望と申しましょうか。こういうことは、総合大学の、何といても得意わざだと思います。学年が進んで、学生の専門性が出てきた時点で、もう1回こういう経験ができると、これまた非常にいいのではないのかなという気がいたします。

これは一つの提案ですが、今私はJABEEというところに関係しております、そこで、工学系、あるいは技術者教育という意味での大学院教育の改革というものに取り組んでいるわけですが、その大学院教育

の一環として、修士1年の前期というようなところで、またもう一度ほかの学部の学生さんとグループを組んで、テーマに取り組む。そういうようなことができる、これは素晴らしいなという気がいたしました。そうすると、MOTやMBAで、本当にねらっている授業のような白熱した議論が、そこで行われることになれば、これはまた素晴らしいことだなという印象を持ちました。

ということで、これが審査を担当しました委員からの話であります。以上でございます。

○江原：どうもありがとうございました。

続きまして、吉原先生にお願いいたします。吉原先生は、青森公立大学経営経済学部の教授をされておられます。よろしく申し上げます。

○吉原：それでは報告させていただきます。

私は第2審査部会に所属し、東北大学が「教育課程の工夫改善」であるのに対して、私どもは「教育方法の工夫改善を主とする取組」を審査いたしました。特色GPの審査について私は、最初の年がペーパーフェリーだったので、次年度からヒアリングをも含めた審査に携わっております。

ここでの報告内容は、お手元の冊子の24頁と25頁に示されています。それに沿って話をさせていただきます。

今年度の申請件数は111で、その審査は2つのグループに分かれ、私がいた第2グループでは、50件を審査しました。そして111件の申請中、選定されたのが17件で、第2グループは8件を選び、全体として約2割弱が選ばれました。

今年度の取組の傾向に関しましては、冊子に抜粋していますが、3つが指摘されております。特に1番目の学生の基礎学力・学習意欲が非常に低下している現状に対して、何とかそれに取り組もうというものが、今年の申請にあたっての特徴であったように思われます。それから、2つ目の対象としての地域あるいは環境への取組を通しての改善、そして体験学習や演習方法の工夫です。特に今日の事例報告においては演習が中心でしたけれども、この取組が非常に多かったと言えます。

申請全体に関して一言申し上げれば、特色GPと現代GPとの違いです。特色GPの特徴の一つは、実績に求めることができますが、割と印象に残ったのは、1年ぐらいで申請をしている大学がありました。確か

に1年でも実績があるといえはありますが、中には今年度に入ってから申請もあり、一委員として、「実績とは何か」と考えさせられた次第です。

今日の事例報告の公立はこだて未来大学について、先ほど第1部でご報告がありましたので、取組内容は省略させていただきます。取組のテーマは、「解がない問題への自己組織的アプローチ」です。この「自己組織的」という言葉が、何とも言えず魅力的です。ご存じのように、「組織」と言った場合に、今までの考えでは組織の発展は外からしなければならないはずですが、実は違うのだと。簡単に言えば、内部そのものから自己変革ができ、そして発展するという考えが「自己組織」です。その考えを教育方法に取り入れよう、とは書いていませんが、私はそういうふうに理解をし、本取組における着眼点に注目しました。

この取組の特色に関しては、4点に絞って私はまとめています。第一に、自発性と自主性で、特に教員の指導をいかに限定するかというところです。これを見ますと、会社に似ているなあと感じました。会社ですと、出勤簿を押す、また、日報、週報、月報と上司に報告をします。公立はこだて未来大学の場合は、週報で、1週間に1度報告をする形で、最低限度のルールでもって、あとは学生に自由にさせる、そういう特徴があるわけです。

しかし見方を変えれば、そういう最低限度のルールを守らせれば、後は放任なのかという問題があり、先ほど佐藤先生から今後の課題としてありましたように、教員の指導方法について、どのように指導しているのだろうかというのが、委員会内部で少し議論があったことは確かです。しかしながら、教員からの教える、指導するというだけでなく、彼らの自主性にできるだけ任せるといことは十分に評価されるものです。

第二に、そういった学生に任せるといことは、研究のレベルがどうなるだろうかの問題が生じますが、そこに書いてありますように、外部からの評価を受けようじゃないか、ということが注目されます。会社で言うならば、成果というものを市場に出してみようじゃないか、市場での評価はどうなんだろうかということで、この自主研究のレベルを維持する、あるいはレベルをさらに高めるために、地域社会や企業との連携によるテーマを設定し、その成果を報告するという点において素晴らしさがあると思われま

第三の特色の組織的取組ですが、やはり3年次の必修というのが一つのポイントであって、1年次及び2年次という年次進行で知識を体系的に学んだ後に、学んだものをいかにして一つの課題のもとに総合的に研究していくかということも、狙いとして評価していいだろうとなったわけです。

第四の特色ですが、成績評価のユニークさです。会社で言いますと、成果主義に立とうじゃないかということですが、公立はこだて未来大学は、「いや、会社とはちょっと違うんだ」ということで、自己点検・自己評価の成績評価版とも言える、とかく甘くなりがちな自己評価を、学生がお互いにチェックするというシステムです。成績評価ということに関しましては、こうした学生間同士の評価を踏まえて教員が行うことは非常に悩ましい問題を抱えますが、しかしながら、こういった成績評価に関するユニークさを評価してもいいのではないだろうかと思います。

以上、4点に絞って、公立はこだて未来大学の取組についてその特色を説明してまいりました。

最後に、事例報告以外で特に印象に残った取組についてです。我々のグループは8件を選んだことを最初に申し上げました。その中でも、今年の特徴にありました、学生の基礎学力・学習意欲の低下への取組に対しまして、名古屋学院大学の「ITによる経済学部教育の標準化と質保証：基礎学力と勉強意欲の低下に対処する自学自習システムと『経済学基礎知識1000題』」という非常に長いテーマですけれども、これを評価いたします。

なぜかと申しますと、インターネットを活用した自学自習システムは他の大学でも使っておりますけれども、学部全教員が手作りによって問題を作ろうじゃないかということ、そしてそれが、学生の解答及び正解率を通して、授業へのフィードバックを行っている。これらの点を評価していいと考えます。

もう1つは、今年の傾向として、地域・環境への取組というようなことで、鹿児島大学と滋賀大学をあげることができます。鹿児島大学の場合は、教養科目を通して、講義からの本質を問うことと、体験を通しての総合的な捉え方を行うことの組み合わせを行ったという点で、評価できます。

滋賀大学の場合は、教育学部であり、教育者としての将来性を見据えた教育方法で、しかも50年にわたった実績があり、非情に印象に残ったものです。

以上、事例報告及び特徴に関して、報告させていただきました。

○江原：吉原先生、ありがとうございました。

続きまして、島田先生にお願いいたします。島田燁子先生は、文京学院短期大学学長をされています。

○島田：私が取り組ませていただきましたのは、短期大学の教育方法の工夫改善に関するものでございます。

今日、短期大学ばかりでなく、4年制大学におきましても、学生のいわゆる体験・経験等の幅が非常に狭いということで、各大学とも、体験教育に非常に力を入れていらっしゃると思います。インターンシップを初め、さまざまなボランティア活動等も含んでのことですが、短期大学はこれが顕著でございまして、今回のこの部門でも、たくさんの取組が申請されました。花を植える、畑や田んぼを作るから、本当にさまざまな取組がありました。ただ、この体験教育というのは、評価、そしてそれがどういう効果があったのかという計測が難しい、一つの分野です。

そこで私は今回、これを計画的にきちんとおやりになって、かつ選定もされました龍谷大学短期大学の、先ほど加藤先生がご発表になった「体験型教育で学ぶ『共に生きる地域づくり』」を中心に、選定理由、あるいは委員会がどう考えているかといった点を、お話ししようと思います。

と申しますのは、龍谷大学短期大学部は平成15年度にも特色GPを取っておられまして、そのときは、「実習事前指導の体系的な実施—ボランティア活動の活用を中心とした取組」というテーマで採択をされました。そして平成16年度は、「大学連携による新しい教養教育の創造—京都地域における単位互換制度」(共同)で選定されておりまして、そして17年度もやはり「産学官地域連携による人材育成プログラム—京都地域におけるインターンシップの展開」で、そして今回と、連続選定されています。申請書を拝見しても、非常に読みやすく、きれいにわかりやすくできておりますので、私どももそのプロセスを学ぶ点が多いのではないかと考えたからです。

実際、私どもも委員会の評価も、実施のプロセス、組織性、そして特色といったところに、高い評価がありました。そして何よりも今回の取組は、先ほどご説明があったように、「砂川アクション」という、砂川と呼ばれる地域なのですが、その地域での共生と、それから「ふれあい大学」という障がいを持った方を大学に

招き入れての取組。この両方をうまく融合させて、しかも、学内に社会活動センターという部署を本年から設置されて、教職員が組織的に運営をされている点。そして、この2つがうまく融合している点ですね。なかなかあれもこれもというのはいまうまく結びつけることが難しいのですが、それが成功していると考えております。

そして、この2つの取組が正課授業に取り入れられ、日常と授業というものがうまく結びついているという点。それから、砂川地区というところが、お隣に小学校がありまして、その小学校の児童が大学にやってくる、子供たち、そして地域の高齢者の方がやはり大学にいらして、そして障がい者というふうには、多重にかかわっておられる点です。

それから、後でわかったのですが、5月からずっと毎月きちんと1つの行事を組み込まれておられまして、計画的にそれを運営されています。かつ、4月から新入生が入られた段階からゼミを選ばれて、たしか25名だと伺いましたけれども、活動を2年生に習って始めるわけです。そして、社会調査の手法で、先ほどお話があったように、独居老人のお宅も訪ねて、お話を伺ってくるという、そうした基礎的なことも含めてやっつけられている点。大変うまくまとめている点。しかも、最後に報告会をされまして、全学、そして地域の方にも呼びかけられて成果を共有されている点が非常にすばらしいというのが、私どもの採択理由です。

ただ、実際に審査に当たって、7つほど伺ってみたいなあということが出ました。1つは、「砂川アクション」と呼ばれる地域との提携、それから「ふれあい大学」の運営が、どういうふうに行っているんだろうかという具体的なところ。そういった運営会議等をどのように実施されているのかということ。それから、理論面と活動との関連。大学の学是、校是である「ともいき」という、共生ですが、それとの理論的な整理というようなことも出ておりました。

もう1つ重要な点は、教育上の効果です。これを今日アンケート等をお示ししていただきましたが、もう少し長い目で見ると、例えば福祉分野に学生さんたちがどの程度就職をするんだろうかとか、今日、少しでも景気がよくなると、なかなか福祉分野に就職しないという学生も出ているように聞いておりますので、その辺はどうなんだろうかという点。それから、何分、短

期大学は2年間という限られた年数なので、ゼミでどのように活動を継承していっているんだろうかという点です。あるいは、4年制大学が同じキャンパスにあるわけなので、本当に共同してやっているのだろうか。短期大学単独で、あれだけのことをやっていたらいいのかといったような点。少しはっきりしなかったのですが、これは大変失礼なことでした。

それから、教員全員が本当にかかわっておられるのか。よく教員間には温度差があると言われますが、その辺はどうなんだろうかといったこと。それから、センターの実際の運営はどうされているのか、センターの組織、どのぐらいの人数でサポートしていらっしやるのかといったようなことが、審査部会でも話題になったところでした。

私は、ちょうど大阪まで行く会議がありましたので、お電話いたしましたところ、「是非おいでください」というお言葉をいただきましたので、10月31日に、そういった質問やら、実際に見せていただくべく個人的にお訪ねさせていただいて、いろいろお話を伺ったところです。

私の感想としては、きちんと準備をされて、まず、基本からうまく、きちっと積み上げられていらっしやるということです。一番感心した点は、すべて記録を取っていらっしやるわけです。何をなさるにもきちんと記録を取って、年度ごとにまとめていらっしやる。これはなかなかやれそうできないことで、今日では、自己点検、自己評価等に際しましても、普段からこういうふうにきちっとやっておけばということを、これがまず基本的にすばらしいなと思いました。

それから、組織化して運営されているということです。教授会できちっと議論され、それから社会活動センターも、教授会がコントロールされております。センター長や副センター長も教授会で選任されて、運営されています。専従の職員は多分助手さんお1人で、あと、実習担当のもちろん教員の方、並びに短期雇用の方で運営していらっしやる。あれだけのお仕事を見事にやっていたらっしやる。そして、こういった記録まで整理されているということが、まず大事なんだなあということを、委員会とは別に、私はお訪ねさせていただいて、大いに学ばさせていただいたところです。取りあえずここまでにさせていただきます。

○江原：ありがとうございます。

3名の審査部会の先生方から、いろいろお話をいた

だきました。それぞれの質問にすべてお答えいただくと、いくら時間があっても足りないように思います。

それで、独断的ですが、事例報告のご発表も踏まえまして私なりに論点を整理してみますと、一番重要な論点は、皆様特に直接触れてはおられませんけれども、背景として共通にある教育の質の問題なのではないかと思えます。つまり、今日の学士課程教育または短期大学士課程教育に求められる質とは何なのか。また、その質の向上をいかに図っておられるのか。そういう問題があるのではないかと思えます。それを伺うと、3つの優れた取組の内容が、より深く理解できるのではないかと思えます。

3名の事例報告をなさった先生方からそれぞれ、実践をベースにして、大学教育の質の問題を中心に、審査委員の先生方からのご質問にも答えるかたちでお答えいただければと思いますが、難しいでしょうか。関内先生から、よろしく願います。

○関内：教育の質の問題、質の向上は非常に大きな問題で、一概にここで私が答えることができる問題ではないと思えますが、大輪先生からいただきました質問に答えるかたちで、お話ししたいと思います。私たちとしましては、教育は、学生の学習活動を支援・援助する、ここが基本ではないかという発想を持っています。基礎ゼミを、そうした質の向上の出発点にしようという考えです。大輪先生からいただいた心配は、3点ございました。第1番目は、基礎ゼミの後に、学生は一方通行の講義を受けざるを得ないのではないかということです。先ほど岡山大学の橋本先生からも、同じような質問をいただいたと思えます。

基礎ゼミを起点にしてその成果を、ほかの講義型の授業にどういうふうな波及拡大させるかという問題については、特色GPに採択していただいて、ここ数年で取り組んでいかなければならないまさに私たちの課題と考えております。

なお、先ほども少しお答えいたしましたけれども、基礎ゼミの担当を経験して、そこでの体験を踏まえ、TAを使いながらグループ学習を導入したり、100名規模でも、学生に繰り返し一定の課題を与えながら、TAがそれをチェックするというように、大講義でも、あるいは多人数講義でも、双方向性の授業を取り入れていくという試みは、現在少しずつなされているのではないかと考えています。

第2点目に大輪先生にいただきました事前FDにつ

いての質問は、基礎ゼミの意義について各先生方が共有できているかどうかということです。たくさん先生方がおりますので、それは一部、ローテーションで仕方なく、という先生方もいるかと思えます。

近年の傾向としてご紹介しますと、基礎ゼミの事前FDを、毎年11月に実施しております。こちらで時間と場所を設定しますので、都合の悪い先生方、授業と重なっている、重要な会議と重なっている、もちろん出張しているという先生方もおりますので、オプションではありません。しかし、参加者数の動向を見ますと、一昨年、昨年、そして今年、それぞれ、70名、90名、120名と傾向的に増えておりますので、先生方の意識に、どうかたちかわかりませんが、積極的に取り組もうとする姿勢が浸透しているのではないかと考えております。

第3点目の質問として、学生の希望が偏らないかということですが、基本的には第5希望まで取っておりますので、できるだけ多くの学部が混在するようなかたちでの手作業的な調整を行っているということがございます。この辺は、ご指摘のとおり、こちらで常に継続的に、そうならないようにやっていきたいと思えます。

最後にいただきました、この試みを大学院生の教育にも適用してはどうかという点では、非常に貴重なサジェスチョンをいただいたという感じがいたします。現在、東北大学でも、大学院の教育をどうするかということについては非常に重要な問題になっておりますので、今後、是非検討をしていきたいと思えます。以上です。

○江原：それでは続きまして、佐藤先生、お願いいたします。

○佐藤：質をどのように高めるかという点でしょうか。

○江原：それを中心にお答えいただければと思います。

○佐藤：まず、質と言われたときに、どのような意味かと今考えていたのですが、レベルという観点、つまりどのぐらい難しいことを教えて、できるようにさせるかという話があるのですが、それは多分違うと想像しますので、そうではなくて、例えばレベルをこちらで設定したときに、それがどれだけ達成できるかですか、そういう話だと理解して、お答えさせていただきます。

私どもの取組では何をやったかと申し上げますと、ただ、目の前に転がっている手の届く範囲の、しかも

できることをやった、ただそれだけでございます。私がこのプロジェクト学習のことをやり始めたのが、未来大学に赴任して半年後です、何の権限もない、何の実績もない、ただの若造が、何も大したことはできない。ですけれども、実際に先ほどの事例報告でご紹介したように、第1年目はひどいありさまで、これは何とかしなくちゃいけない。

ということで、できる範囲で、私の権限の及ぶ範囲の中でルールを徹底したり、こういう評価方法でどうだろうかとか、先生方のところに回って、いろいろネゴシエーションを取ったりしながら、やってまいりました。

学生の質だけではなくて、大学の質というのを考えますと、うまく行ってないところがいっぱいございます。それがここ数年でうまく解決できたところがあるとすれば、やはり目の前にある課題を地道にコツコツ、汗を流して、できることだけでいいのでやっていった結果だと思えます。

残念ながらそういうことができなかつたところというのはまだ問題点として残っておりますので、今後解決していかなければいけないなと思っております。ちょっと抽象的な回答になってしまいましたが、いかがでしょうか。

○江原：どうもありがとうございました。それでは加藤先生、お願いいたします。

○加藤：教育の質という概念が出ましたけれども、これは本当に難しいことです。私は福祉を専攻しておりますが、福祉の領域では、クオリティ・オブ・ライフということを申します。これはWHOが、数年前に、6領域、30数アイテムで、クオリティ・オブ・ライフのインデックスを表しましたけれども、クオリティ・オブ・エデュケーションの指標提示は壮大な話になりますが、取り組んでいく必要があるのかもわかりません。

申請までのプロセスについて少し話をしろということでございましたので、先ほど島田先生におっしゃっていただいた、実習について先ず述べます。これをわが短大では重視しております。と申しますのも、いろいろな福祉施設に学生が実習に行き帰ってくると、「うちの娘、変わった。うちの息子、変わった」と、本当に親御さんに喜んでいただけるんです。「ああ、成長したなあ」と、我々も思えます。

ですから、その教育力のある実習、フィールド・ス

タディ、もしくはコーポレーティブ教育を日常化していきたい、と考えました。ある意味でのサービス・ラーニングを学内化する。そういうことをやっていきたいと、学生の実習から発想しました。

かつ、学生が実習から帰ってきて、「なぜこの福祉施設で暮らしていらっしゃる方が地域で暮らせないんですか」と申します。「すべての人が地域で暮らす社会が当然ですよ」ということを我々は教壇で教えているんですけども、言っていることと、やっていることが違うじゃないか、ということになります。このように、実習から、学生の言葉から動機づけられたというのが正直なところです。

2000年に教員が合宿をしまして、ここで、この取組をやっていこうということが、激論の末、とにかく当時の学部長の大きな助言で始まりました。そして、2001年に、大学教育開発センターから、年間30万の予算が付きまして、そして、先進的に取り組んでいる東京学芸大学の松矢勝宏先生や、今、立教大学におられる河東田博先生。それから大阪府立大学の安藤忠先生等々と、その場所に行ったり来ていただいたりして、1年間準備をして、2002年にスタートしたわけです。

2003年にGPを申請したいということで、学内に申し出ました。学内でコンテストを受けまして、プレゼンで点数が足りなくて落ちてしまいまして、GP申請までには至らず、翌年ようやく認められて、申請に至ったということです。

この試みを通して、障がい者施設のことを入学したときにはこれっぽっちも思っていなかったけれども、障がい者の施設で働きたいと動機づけられる学生が出てきているのも、ありがたいことだなと思っております。

○江原：次に、2つ目の共通の論点ですけれども、これは島田先生を初め、皆様おっしゃっていることで、既にお答えになったところもございますが、改めて伺いたいのですが、事例報告をしていただいた大学では、申請するために、学内で実際にどのように取り組まれて、どのようにまとめられていったのかを簡潔に伺いたいと思います。これはフロアの先生方もご関心がおありだろうと思います。もう少し平たく申し上げますと、採択されるためのノウハウの問題です。

加藤先生のお話で言うと、どのように激論を収めたのか。その後、どのように工夫されたのかというのを、ほんのわずかしかおっしゃっていただかなかったよう

な気がいたしますので、まず加藤先生から、どんなふうに取り組まれてこられたのか。

○加藤：その後ですか。

○江原：というよりも、この申請を出すまでの段階というのが私どもが一番関心がありますので、お教えいただきたいと思います。

○加藤：もちろんコンサルにも入ってもらいました。学内で、GPのためのタスク・フォースを立ち上げました。タスク・フォースには、社会学部長と、経済学部長が入ってくれまして、もちろん業者も入ります。そして、とにかく議論、議論。一語一語チェックして、「全然伝わってないぞ」と言われたり、「そこが説明になってないじゃないか」と言われたり。そのあたりを、毎年、繰り返したわけでございます。

○江原：佐藤先生は、一番配慮されたのはどういうことでしたか。

○佐藤：私が赴任する前に、本学ではプロジェクト学習は始まっておりまして、私が赴任したのは半年過ぎてからでございます。お恥ずかしい話ですが、第1回目はひどかった。私が2年目にワーキンググループの委員長を引き継ぎまして、できていないところ、ひどいところは、とにかくできる範囲で、先ほど申し上げたように解決していきました。

プロジェクト学習という試みは教員に負荷が掛かります。学生も大変でして、その当時、やめるか、やめないかという議論が起きました。大学がよいほうにさえ向かえばよい。ですから、もしプロジェクト学習をやめて、大学がよいほうに向かうんだったら、それもアリだということで、いろいろ議論はしたんですけども、とりあえずそういう難しい話は置いておいて、自分の目の前のできることは、解決していきました。

そうしているうちに、あるターニングポイントを過ぎまして、自然とうまくいくようになりました。今は、本学でプロジェクト学習をやめようという雰囲気は、全くございません。

本学は、実は3回、特色GPに申請しましたが、見事に落ちています。今年は私に順番が回ってきましたが、正式に準備を始めたのは締め切りの2週間前でした。しかし、いずれにせよ、私に書けるのは、4年間、私および担当の教員方がやったことしかありませんので、それをすべて書きまして、それで終わりです。学内のチェックもほとんどしていません。ストレート勝負で、直球を投げたら見事に受け止めてくださって、



私は非常にありがたいなと持っております。

○江原：ありがとうございました。それでは関内先生には、東北大学で、今回の取組がどのように決まって、どのようにまとめられていったのかというのを、もう少し具体的にお話しいただきたいと思います。

○関内：東北大学の場合は、特色GPに限らず、さまざまなGPや大学院イニシアティブなどについては、各部局からの申請を受けて、執行部のほうで、学内審査というところちょっと大げさでしょうか、場合によっては、役員を前にしてのプレゼンテーションのヒアリング等が行われます。そのような仕組みの中で、総長以下、執行部役員の方が決定していくということになります。

今回の特色GPにつきましても、高等教育開発推進センターが申請した取組を、学内で認めていただいたということです。その後は、業者の方などは全然入っていないで、本当に手作りの、私たちだけの少人数で書類作成作業を行ってきました。

まさに、特色GPのためにこの取組を実施したわけではありませんが、平成12年度の改革において私どもが実施したことに他大学の参考になるような特徴があって、それなりの成果が出ているのではないかとということで、今回申請したという経緯でございます。

○江原：ありがとうございました。

3名の審査員の先生方から、特に改めて採択校に伺ってみたいことが、何かございますか。

○大輪：関内先生にお伺いしたいんですけども、私の話のところでは一番最初にあった、要するに学部を超えて一つの教育に取り組む。その辺のところ、多分、今回の取組以前に、いろいろなそういう土壤があったことだと思いますけれども、10学部そろって1つの導入教育と申しましょうか、そういうものに取り組もうとなるというか、そういうところへ持っていくというのは、非常に大変だったのではないかなあという気がするんですけども、その辺のところはいかがでしょうか。

○関内：平成12年度に、基礎ゼミのみならず、本学の教養教育、全学教育と言いますが、全学教育の改革が行われました。この改革をもとに、全学教育の教育課程として、平成14年度から本格的に走ったという経緯がございます。

ちょうど平成12年前後の状況について只今の質問にお答えしますと、私なりに考えますと、主体的な条

件と、客観的な状況が合ったのではないかとというようなことです。主体的な条件というのは、やはり当時の執行部のリーダーシップが、非常に大きかったと思います。

当時、阿部博之総長のもとで、副総長として、馬渡尚憲副総長と星宮望副総長という体制にありまして、その中で、これからお話しする客観的な状況として教育をめぐるいろいろな問題が噴出しており、それをとらえて、一気に改革を進めましようというリーダーシップを取られたということだと思います。

全学教育改革検討委員会を作りまして、その中のワーキンググループで、各科目なり、あるいはいろいろなテーマについての作業が始まりました。ワーキンググループには当時の坂本尚夫薬学研究科長はじめ、各部局の部局長や評議員クラスに入らせていただくということですので、決めたことは、各部局、ちゃんと責任を持ってやってもらうというなかたちの全学体制が取られたのではないかと思います。

客観的な状況としましては、恐らく、東北大学は研究大学指向ということを出しておりましたので、大綱化直後の全学教育をめぐることは、担当責任者であった歴代の大学教育研究センター長の努力は孤軍奮闘状態で、英断を奮って新たな実施体制や教育課程・方法の刷新の方向にむかう土壤が大学全体にはなかった、これは私の個人的な考え方ですけれども、と思います。当然ながら、担当教員体制や教育課程をめぐるさまざまな問題や課題が、ちょうど平成10年前後から噴出してくることになったわけです。こうした課題の山積や問題の噴出が大きかっただけに、主体的条件としてのリーダーシップも功を奏することになったのかと思います。

もう一つだけ、東北大学のちょっと特殊な状況があるかもしれません。先ほど15部局という話がありましたが、10の学部と、独立系の大学院が5つあります。こちらの大学院は、学部学生を持ちません。しかし、大学院重点化の中で、大学院生を確保するということがございます。そのような状況から、研究所であるとか、独立系の大学院が、教養教育に積極的な姿勢を示していたという、そういうような条件もあったのではないかと思います。以上です。

○江原：ありがとうございました。

○吉原：先ほど、佐藤先生が「直球で申請をした」とおっしゃったので、「あー、そうなのか」と思いました。

と申しますのは、公立はこだて未来大学は、少々評価が分かれた面があったわけです。しかしながら、委員の間においては、「直球」なるがゆえに、「公立はこだて未来大学はこれなんだ」と掴めたのです。

したがって、これに関連して言えることは何かという、我々の審査は最初ペーパーから入り、次にヒアリングを行うのですが、そのペーパーのうまさ、文章のうまい申請大学があります。しかしながら、どうも中身が、というようなことがヒアリングの段階でわかる場合があって、逆転するということがあります。逆に、内容はいいけれども、説明が適切でない、表現がうまくない申請大学があります。でもそれは、自分の大学は他とどこが違うのかを明確に掴んでいないことに由来するものと思われまます。

したがって、先ほど加藤先生が「コンサルの必要性」に触れておりましたが、確かにコンサルの必要があるかもしれませんが、よくお考えになっての依頼をすべきと思っています。

○佐藤：私の書いた文章がよかったのか悪かったのかというコメントはなかったように思うので、よくわからないんですけども。正しい日本語で数式を書きみたいイメージで、少なくとも文法的に合っていて、あと、ロジカルな説明がされていて、というのは必要だと思います。

この申請書を書いたときに、「佐藤さんの文章は、あまりに無味乾燥過ぎる。もっと熱意を入れたほうがいいんじゃない？」というコメントがあったのですが、論理構造から熱意が伝わるように書かれていればよいと思います。

○江原：17時30分まで、あと30分ございます。後半は、フロアとの質疑応答及び意見交換の時間にさせていただきます。どうぞご自由にご発言ください。いかがですか。

○長谷川：岡山大学の長谷川です。

今回の特色GPというのが、絹川先生のお話にもありましたように、教育課程の改善か、教育方法の工夫というようなことだったと思うんですけども、問題は、課程を工夫改善しても、方法を工夫改善しても、だれがやるのかというのが問題で、やる人がいなければ、駄目なわけですね。

1年目は熱意のある人が参加して、うまくいくと思うんですけども、だんだん何年もそれを重ねていったときに非常に気掛かりなのは、それに参加する教員

が大学の中でごく一部であって、それ以上広がらないのではないかと。そうすると、その先生は非常に負担になりますよね。そうかと言って、ローテーションにしようかと、熱意のない人が義務的にやって、結局、いくら方法がよくても、課程がよくても、うまく趣旨どおりに実行できないということがあると思うんですけども、その辺はいかがでしょうか。つまり、担当する教員をどう増やして、いかに教員を変えていくかというところで、どういうふう工夫されているか。FDのことは先ほど関内先生の話に出ましたけれども、もう少し詳しく、参考になることをお聞かせ願えたらと思います。

○江原：どなたにお答えいただければよろしいでしょうか。

○長谷川：それぞれの先生に、是非一言、お願いしたいと思うんですが。

○江原：一言ずつお願いいたします。どうぞ。

○関内：ちょっと難しい問題ですけども。先ほどの質問との関連からすると、ローテーションで嫌々ながら回ってきた先生が基礎ゼミをやってみて、面白かったと。これは今までの授業とは学生の反応が違うなということで、それでもう効果はありということだと思いますね。そういうふうな意味での、むしろ自然なローテーションも結構OKじゃないかという感じで、広がり期待したいという感じがあると思います。

○佐藤：本学における取組に関しては、システムを作り実施しました。私が今ここで仮に倒れてもシステムが動きますので、それは大丈夫です。

問題は、担当教員の熱意とか質の問題です。おそらく、プロジェクトの牽引役として指導できる教員というのは、3分の1ぐらい。残りの3分の1は、例えば補佐役ですとか参謀です。残りの3分の1は、例えば調整役とかです。教員にもいろいろなタイプがおりますので、どのように教員が入れ替わっても、その3つの割合というのは恐らく変わらないと思います。それを考えまして、本学では、教員2～3名で1つのプロジェクトを指導するという体制を取っております。

今のところ、この体制により、どのプロジェクトでも大きな問題なく、活動が行われていると思います。

○江原：理科系の大学のご発言のような気がいたしましたが、どうぞ。

○加藤：「どんないいことをしていても、社会的に認められなかったら駄目だ」ということは、何度もこの間、

学内で言われてきました。ですから、全学的なタスク・フォースを立ち上げて申請に向けて取り組んできました。その過程で、「取組の意義をみんなで共有できるようにしていきたい」というふうに皆さん先生方が思えるようになったのは、とてもよかったなと思っています。たしか絹川先生の言葉だったと思うんですけども、「GPというのは派手なことをしなくていいよ、真面目に普通のことをやっている取組が採択されるんだよ」とおっしゃっているのを聞いて、随分心強く思ったのを覚えております。

今おっしゃったことに関連すれば、意義を共有化できているのかどうか。方法が共有化できているのかどうか。それから、力量の配分の問題なのかどうか。こういったことが、GPの申請のプロセスの中で浮かび上がってくることがあります。ですから、GPの申請そのものが、自分たちの活動を、パブリックな場でまさに評価していただく。そのプロセスそのものが、我々のとても大事な振り返りになり、充実の足掛かりになっていったと思っています。

GPをいただけることになって、本当に心からほっとしています。というのはやはり、これで予算的なことや制度的なことも含めて、ますます裏付けができて、それこそ数人の先生方が将来代わったとしても継続してやっていけるように、しっかり大学の中で認知されたこととなりますので、やはりGPをいただけて、本当によかったなと思っています。

○江原：確かに学内認知というのは、案外、一番重要なかもしれませんね。

文部科学省への質問やご意見も、どうぞおっしゃってください。幸い伊藤学司大学改革推進室長がそこにおられますので、何でも答えてくださるということです。何でも結構です。ほかの質問でも結構ですので、いかがですか。ご発言いただきたいと思います。どうぞ。

○戸沢：産業技術大学院大学の戸沢です。

私の大学は4月にできたばかりで、私も大学の教員になったのは4月になってからなんですけれども、それまで企業にいました。

私の大学は、社会人を対象にして教えるという大学です。実は今日の話で非常に興味があるのは、学生から見たときに、今日の3つの事例を話していただいて、学生は一体、だれから何を学んだのかなということなんです。普通だと、大学というのは、教員が自分の

持っている知識を学生に教えるというのが、多分かなりの場合、メインと考えられていると思うんですけども、今日の事例は、学生は多分、教員から学んだことよりも、一緒に例えばチームを組んで、プロジェクトをやって、あるいは、そのプロジェクトの中でいろいろなふれあいをした。そういうところからいろいろなことを学んでいるんじゃないかなという気がするんです。

この活動自体が特色があると見られた、そういうふうに評価されたということ自体が、ひょっとすると、大学の教え方というのは、学生が学ぶ場所というものの目の付け方をちょっと変えたほうがいいんじゃないかなということを言っているのかなというふうにも感じるものですから。それについてのご意見を、どなたに聞いたらいいのかわからないんですけども。

○江原：先生の意見はどうか。

○戸沢：私は、大学の性格から言って、プロジェクトで学生さんたちが、互いに、教員が教える以外のものを、社会人学生の場合は、学生が持っているいろいろなものを、ほかの学生から吸収してほしいという気持ちがあります。そういうふうに学んでほしいなと思っているんですけども。

○江原：ただいまのご発言について、どうぞ、島田先生お願いします。

○島田：ごもっともなご発言ですけども、やはりきちっとした理論的なベースがなくては、いろいろなものを吸収する場合に、大学と言えないと思うんですね。やはり最終的には教員が大事であり、教員が責任を持つべきだと私は考えております。

○江原：ほかの先生方、いかがですか。

○吉原：答えることは難しいのですが、演習、ゼミを中心で考えてみると、たとえば体験を通しての具体的な問題に入っていた場合、学生は目の前のこととか、あるいは動いているものの方に目を奪われてしまう傾向にあります。しかしながら大学というのは、動いているものの中での動かざるもの、あるいは本質的なものを教えることも忘れてはならないと思います。

また、たとえば1年生でのゼミと多くの大学で行われている3年生のゼミを比較した場合、教員の果たす役割は違います。高校から大学へという学びの転換に当たって、教員がどのように学生に接するのか。それから、1年生と2年生で専門の基本的なことを学んだ上で、総合的なものを学ぶ3年次での教員の接し方は

自ずと違ってきます。そうした知的レベルが異なる学生に接する教員としての教育を行う質が問われるんじゃないかならうかと、私は思います。

○江原：ほかにございますか？ どうぞ。

○大輪：今日の3件というのは、確におっしゃるように、みんなプロジェクト型の学習ということですが、私は先ほどJABEEにも関連していると言いましたけれども、JABEEでも、いろいろ議論をしている中で、そういう教育というようなものをセットにして、つまり講義は講義できちっと行って、それに関する演習ですとかプロジェクトですとか、そういうものを作って、両方から学生が学び得る。

講義というのは、先ほど島田先生が言われたように、きちっとした理論、それからベースを講義として行う。ただし、こればかりだったような気がするんですね、昔からの大学の教育というのは、そればかりですと飽きてしまうし、なかなかそこから出られない、自分の意見を発表する場がなかなかないとか、議論をする場がないというようなことになりますので、講義は講義できちっとやるけれども、それと関連の深い演習を、是非やっていただきたい。こういうふうなことを、今お願いしております。お答えになったかどうか、ちょっとわかりませんが。

○江原：どうもありがとうございました。

ほかにご質問ございますか。ご意見でも結構です。

○香川：女子栄養大学の香川と申します。過去1回も採択していただいたことがないのですが、そういう大学も大変多いと思います。最後のところは文部科学省の方にもお尋ねしたいのですが、それからもう1つ、非常に限られた時間ですから、私がこれから申し上げる話は昨年11月29日の中教審のヒアリングで私が多くの資料を添えて申し上げていることなので、11月29日、の中教審の記事をインターネットでお開きいただくとわかることですが、そのヒアリングの後に、特に国公立大学から私に対して、非常に多くの評価、質問をいただきました。

いよいよ本題に入ります。私どもは大変な努力を、過去、学内で重ねてきて、国家試験の合格率が50%台であったものが、昨年は92%とか、今年は93.5%でしたが、そのぐらい多数の学生が合格をするようになった。それは、個別の教育から、コンピュータの教育から、あらゆる改善をしていったのです。合格率だけではありませんが、いろいろなところを改善をして

も評価していただけないのだろうか。教員一同、大変がっかりしています。それが第1点です。実績というものが、どうして評価されないのか。これだけ向上した大学はないでしょう。

もう1つ、私が前におりました大学は自治医科大学という大学ですが、これも全国の大学の先生方は恐らくご存じないと思います。朝日新聞社が出しております大学ランキングというものをご覧になると、大変びっくりされると思いますが、科学研究のインパクトファクターは、自治医科大学がトップです。その次が東京大学で、その次が京都大学。どうして米国では公平な判断ができるのか。皆さんの頭の中にあることと、世界の科学界が見てくださることとは、非常に大きなギャップがあります。そこにはやはり、限られた方が審査をされる。

それから、もう1つ大事なこと、その中教審のヒアリングのときに私が申し上げたことですが、教育というのは、受け手があって、成り立つのです。私のように3年間、外国の大学で教授をしていて、それから日本へ帰ってきて、また日本で教育をしたときに、日本人というものと欧米人というものは、大変違うのです。最近では、それに対して非常に客観的な、ただの心理テストではなくて、脳の機能的な画像処理によって、性格の遺伝子というものが本当に教育と関係しているという、客観的な証拠がたくさん上がってきています。

ただ、残念なことに、そうしたブレイン・サイエンスの最新の発展とか、それから性格関連の遺伝子の欧米人と日本人との相違とか、そういうものに基づいた教育をやっているところが、私共以外にあるのだろうか。今日も拝見したのですが、少なくとも採択された大学の中には、そういう考えで教育をされた方は一つもないと思います。あるいは大半のせつかくの申請は、全部失われてしまいます。非採択のものは、文章として残らないですね。ですから、たまたま私のように中教審のヒアリングに出た意見が残るわけですが。

最後に、お願いがあります。審査員のご意見も伺いたいし、文部科学省のご意見も伺いたいのは、こういうふうには評価というものは大勢が異なる立場で見た場合は違うのだから。今は情報化の時代です。ですから、申請のあったすべての内容の要旨を、GPの、今、文部科学省が全国に流しておりますけれども、そこに流していただけないでしょうか。そうすると、自

分たちはこういう方法で教育をすればいいんだということを考えている先生は、関心のあるデータを集めることができます。

それによって、各大学に、1校1票というよりは、違った立場の方もおられるでしょうから、1つの大学に2票か3票ずつ与えて、投票してもらおう。それほどここにメリットがあるかと言ったら、客観的な評価というだけではありません。それは、投票しようとする人や、関心のある大学人は、落ちたものでもちゃんと読みます。今は先生方が、あるいは各大学が非常に努力して集めた、その貴重な努力の集積の大部分は破棄されています。それはインターネットで読めるようにして、そして、皆さんの教育改革の糧にさせていただきたい。それが私の希望です。そういうことが、文部科学省として可能でございましょうか。

これは、いろいろな投票がありますけれども、今は、放送でもその場で世論が集計できる時代です。ですから、先生方も大変ご苦労され、私どもも先生方のご判断、あるいは今日発表された方々のお話、大変ためになりました。それはそれとして結構ですが、埋もれている努力を発掘していくという努力を、是非していただけないでしょうか。いかがでしょうか。

○江原：評価のあり方の問題だと思いますので、絹川委員長と伊藤室長に、簡潔にお答えいただきたいと思います。絹川先生、お願いいたします。

○絹川：よく何度も申し上げているんですが、特色GPプログラムが、大学評価のすべてではないわけです。極めて限定された評価行為であるということをお考えいただきたいと思います。ですから、実績があるのになぜ採択されないかと申しますと、それは、たくさん並んでいる中から1割ちょっとを取るといって、一つの枠を与えられているわけですね。そういう中で採択される大学が決まってくるわけです。

逆に言いますと、採択されない大学が優れていないというようなことは、主張していないわけです。単純に数学的な論理で言いますと、限られた枠の中で、こういう大学を選ぶというだけなわけです。選ばれたものを参考にして、皆さんと一緒に考えようというところに趣旨があるわけで、先ほどごあいさつを申し上げたときにも申したのですか、採択されるということに目的があるわけではないわけです。もちろんおっしゃっているように、それぞれの大学の教育活動を助成するような、別の枠組みというのは私は必要だと思

いますし、特にこういう競争的な資金を中心としたプログラムも必要でしょうけれども、それよりも一番大事なのは、もっとベーシックなところにきちんと予算を付けるということのほうが私は大事だと、個人的にはそう思っているわけです。

いずれにしても、特色GPというのは極めて限定されたプログラムであるということをお理解いただきたいということです。文部科学省のほうのお考えを聞きたいですね。

○伊藤：文部科学省の伊藤でございます。

評価方法につきましては、こういうGP型の事業を選定する際の評価方法としても、恐らく暗中模索の中で、いろいろ試行錯誤を繰り返しながら、皆様にご理解をいただけるようなものを、少しずつよくしていくんだというような、まだ段階なのかもしれません。ただし、どこまで行っても、恐らく全員が納得していただけるゴールにはなかなかたどり着けないんだろうと思っています。

この特色GPは今年で4年目ということで、GPとしては最も老舗でございます。さらにその1年さかのぼれば、COEというかたちで、こういうようなかたちの取組の評価という部分を選定してきたわけですが、例えば審査員の視点がちょっとずれているのではないかと、審査員を選ぶ段階で少しバイアスがかかっているのではないかと、そういうさまざまなご批判をいただきながら、絶えずそういう声は、実は審査にも反映をいただいています。特色GPも、それぞれの審査に対するご意見というのもいただきながら、大学基準協会の中で、次年度の審査員を選ぶときに参考にさせていただくとか。

あとは、自分たちが選んだ評価自体が妥当だったのかどうかということも、3年後、4年後の段階で、現地の大学に行って、その取組を、自分たちの目が本当に確かだったのかどうかというような観点で、絶えず自己反省もしながら改善していただいているというふうに、大学基準協会のほうで、かなりご努力いただいているところでもございます。

例えば、ごく数名の方々が勝手に集まって決めているのではないかとというように映る部分もございしますが、これに至っては、非常にたくさんのペーパーレフェリーの方々にもご審査をいただいている。そのペーパーレフェリーについても、今年度から、事後でございましてけれども、全員名前を公開して、こういう方々

が見て、みんなで決めたんだという部分を、公開をするというなかたちも取らせていただいております。

さはさりながら先ほどご提案をいただいたように、全国 700 の大学、短大等も含めて約 1,000 に近い目で見たほうがいいのかというようなかたちのご意見も、あろうかと思えます。

ただもう一方で、では概要だけ公開して、2枚ぐらいの文字づらだけ見て、本当にいい取組かどうかわかるのかというような部分もありますので、私どもは、恐らく、この選び方がベストだというようなものは、まだたどり着いてはいないのだと思えます。

いろいろなかたちでのご意見をいただきながら、いろいろな試みもしながら、少しずつ、特色GPだけではなくて、ほかのプログラムもございますので、このプログラムならこのぐらいやったほうがいいのかとか、このくらい財政支援が大きいのであれば、このぐらい手間を掛けたほうがいいのかとか、逆に、このぐらいなら、そんなに手間をかけるとか違って大学も大変になるのではないとか、いろいろ考えながら、選んでいくというのがあるのかなと思っています。

それと、絹川先生がおっしゃったように、まさにこれは、大学としてはGPを得るとするのは非常に名誉ですし、大学全体のPRにも使える部分ですし、大いに使っていただきたいと思いますが、同時に私どもは注意深くそこは発言をしていかなければいけないと思いますが、GPというのは、大学全体の営みの中で言うと、本当にごく一部の、小さな取組です。

今日は、実はこの裏番組で、高校関係者を対象にするパネルディスカッションを先ほどまでやっていたのですが、高校関係者のほうから、GPを取った、GPを取ったと言って威張っているけれども、よくよく話を聞いてみると、大学全体の中の一部の学部の先生だけしかやっていなかったじゃないかというようなところで、そのところをPRする段階でも、アピールする段階でも、うまく言ってくださいよ。ちゃんと間違わないように、誤解を与えないようにしてくださいよというような、実は注文もついたところのございます。そこは、我々も大学関係者も同時に、肝に銘じなければいけないところだなと思いました。

○大輪：審査の方法が出ましたので……。1つは、なぜ私がここに座っているのかということなんです。多分、ここにずらっといらっしゃる先生方の中で、大

学教授でないのは私だけです。なぜ私が大学基準協会の審査に入ったり、特色GPの審査に入ったりするのかというのは、ピュアレビューというものだけだと、やはりちょっと問題があるという意識を持っておられるんだろうという気がします。これは、中教審にも大学の先生以外の民間の人が入っていますし、同じように、少しは外の血を入れるということが必要なのではないかと。

そうすると、どのぐらい入れたらいいのかというのは非常に難しい問題です。私は、孤軍奮闘じゃないですけれども、できるだけ発言をするようにして、大学の先生とは違う考え方もあるかもしれないということ、主張しようとしております。

そんなことも含めて、ちょっと先ほどの質問で気になりましたのは、日本中の大学で投票すればいいじゃないですかというふうになってしまうと、本当に大学同士の評価でしかなくなってしまおうという感じがいたします。教育のステークホルダーというのは、非常に多数の、それからいろいろな種類の方がいらっしゃるということで、そういうことも考慮に入れながらという気がいたしましたので、ちょっと蛇足でございますが。

○安藤：金城学院大学の安藤と申します。

特色GPを初めとして、GPは教育に対する大学の考え方を改めて、すばらしい仕組みだと思っておりますが、何ごとも長年やっていると、だんだん疲弊してくるのではないかなという、ちょっと危惧もあります。

今お話に出てきたように、特色GPを取ることが目的化しないように、是非これからは審査のほうをお願いしたいと思っています。特に多くの学生が参加しているような取組を、なるべく公平なかたちで見ただけのといいと思うんですが。

ちょっと気になっているのは、特に「特色」ということなものですから、先にやったほうがメリットがあるというような、例えば、この取組は前の大学でやっていたということで、さらに大きく改良したような取組なんだけれども、新鮮味がないような取組がもし出てきたときに、それがどのように評価されるのか。「特色」という点と、それから実際の学生の満足度というか、伸びみたいなものを勘案したときに、同じような取組が二度、三度出てきたときにどう評価されるかというのを、少し審査の方からお話を伺えればと思いま

すが、よろしく願います。

○江原：先ほど絹川先生もお答えになってきたと思うんですが、私も4年間審査員をしておりますので、私が代わりに申し上げますが、同じ取組でも、大学の規模が違う、専攻の分野が違う。そういう場合には、同じ取組でも違いかたちで展開している。そういう観点では、毎年特に私が所属している部会では、意図的に強く申し上げます。

ですから、最初だからいいんだというのではなくて、地道に実際に学生と向き合ってやっている教育を評価するというのは、少なくとも姿勢の上では非常に重視した審査を、今までしてきたように思います。絹川先生、それでよろしいですか。

○絹川：申請がありました大学については、採択された大学も非採択の大学も、すべてに対して審査コメントを差し上げています。その審査コメントの書き方に関して、いろいろ議論はあるわけですが、私はなるべくそれぞれの取組のいい点を書いてほしい、ポジティブに審査コメントを書いてほしいと申し上げていました。ところが、ポジティブに審査コメントが書いてあるのに、なぜ採択されないのかという反論が出てくるわけですね。ですから、私の方針が間違っていたのかもしれないかもしれませんけれども。

その中の一つに、この取組はいい取組である。けれども、既に他の大学の事例もあるので、というような言い方で、採択されない理由を無理に付けているわけですね。そういう例が幾つかあるようですので、今後はそういう点は少し反省して、書き方については、もう一度ご一考いただくということにさせていただきたいと思います。

ついですが、非採択校の事例も公開したらどうかということも私も大賛成でして、公開したほうがいいということをお初めに言ったのですが、やはり公開されては困る大学もあるわけですので、私は自主的にそれぞれの大学のホームページで、自分たちはこういう申請をしたということ、積極的にアピールするほうがいいのではないかと考えております。

○江原：今のご発言でよろしいでしょうか。

○安藤：ありがとうございました。

長年やっていると、どうしてもテクニク的なところに走ってしまう。歴史があると、そういう情報も入りますので、是非そういうところではない審査を、これからもよろしく願います。ありがとうございました。

いました。

○江原：私などは、素朴にスッと読んでいいやつが、いいんですね。どうしてもパッと決まるのは大体は決まるんですけども、最後はなかなか意見がまとまらない。だから、テクニクではないというのが、率直な感想でございました。

時間が17時半を過ぎまして、もうこれ以上延ばさないほうがいいと思いますので。司会の不手際で、なかなかまとまりがなかったかと思いますが、いろいろご意見を賜ったと思います。これを機会に、また来年度もご参加いただければと思います。どうもありがとうございました。(拍手)

(了)